ＧＡ文庫提出用　新企画プロット

『ダークヒーロー・ジャイアントキリング』

2015/XX/YY

望公太

※前書き。

　このシリーズを思いついたきっかけは、『学園異能バトルの世界に、ギャンブル漫画の主人公みたいな最強の勝負師がやってきたらどうなるか？』っていう気持ち。

　頭脳や博才で俺 TUEEE する話が書きたかったのだ。

　異能バトルと違って、こっちは割りと真面目にプロット書いてます。何度か打ち合わせして、最終的に企画会議を通ったプロットがこれです。

　なお、当然ながら**『最強喰いのダークヒーロー』一巻に関する重大なネタバレが多数含まれていますので、一巻読了後に読むことをオススメします。**

GA 文庫提出用　新企画プロット

――タイトル
『ダーティー・ディード・ドゥーン・ダーク・ヒーロー』
『ダークヒーロー・ネバー・ルーズ』
『最悪王の快進撃』
『ダークヒーロー・ジャイアントキリング』
『ダーティークラウン・ダークヒーロー』
『早漏騎士の悪雄譚（ピカレスクロマン）』
※プロットの時点ではタイトルはまだ未確定。『最強喰いの（ジャイアントキリング）ダークヒーロー』という形に落ち着いたのは、一巻書き終わってから。基本、タイトルは最後に決まることが多いです。そして一番上のタイトルから滲み出る『D4C』へのオマージュ感ときたらもう……。

――キャッチコピー
『最弱の詐欺師が、奇策と詐欺で世界の頂点へ』
『最悪の男が、手段を選ばずに勝ち続ける』
『「ククッ！　勝ちゃあいいんだよ！」
最弱の詐欺師が、ペテンで武闘の頂点へ』
『ネオピカレスクロマン』

――コンセプト
異能バトルがエンタメとなった世界で、才能には恵まれないが知略と洞察力に優れた主人公が手段を選ばずに成り上がる話。
一言で言えば、『アカギ』『鉄鍋のジャン』の異能バトル版。実力はないが一流の勝負師である主人公が、「勝ちゃあいいんだよ」の精神で、ルールの穴を突いたり、心理の隙を突いたりしながら、勝ち上がっていく。
※プロットは編集部に対する新企画のプレゼンテーションみたいなものなので、わかりやすいキャッチコピーやコンセプトを書くのが大事だったりします。ちなみに、僕が一番好きな料理漫画は『鉄鍋のジャン』です。

――キャラクター
・阿木双士郎
※主人公の名前、結構お気に入り。たぶん誰にも理解されないと思うんですが、自分のネーミングがガッチリハマると、『あ、この作品イケるわ』という感覚があります。異能の『安藤寿来』でも同じ感覚がありました。

主人公。三年生。白髪。生まれつきの適合者ではなく、そのため魔力開放状態（フレア）

『最強喰いのダークヒーロー』プロット

の発動時間が極端に短いため、『早漏』と全校生徒から揶揄される。三年最後の戦いに全てを賭けるため、これまでずっと実力や勝利への飢えを隠していた。
　性格は最悪の一言。勝つためならば、いかなる手段も用いる。相手の武器への細工、悪評拡散、詐欺を躊躇なく用いる。
　目的は、今年度の『祓魔祭（後述）』で完全制覇を成し遂げること。

　祖父は世界が荒れてた頃に英雄とまで呼ばれた存在だが、双士郎にはその才覚は一切受け継がれていない。晩年、祖父は、自分の孫が才覚に恵まれなかったことに絶望。虐待にも等しい訓練で主人公を鍛え上げたが、主人公が人並み以上の成果を出すことはできなかった。
　決め台詞
「お前は強い。俺よりもはるかに強い。だけど――今日勝ったのは俺だ」

・リザ・クロスフィールド
　ヒロイン①
　一年生の留学生。
　新入生最高の素質の持ち主で、今期も活躍を期待されていたが、初戦でダークホースである主人公に敗北（卑怯な作戦のため）
　騎士達の武器を製造する大企業の令嬢であり、一年目から結果を出さなければ祖国へと強制送還されることが決定していたため、初戦敗退に絶望するが、主人公からチームを組まないかと誘われる（大会には個人戦と団体戦があるため）
　生まれながら大企業の令嬢という役割を押し付けられたことにもがき苦しみ、自分を駒としてしか考えていない一族を見返すために、日本の国に入学して大会の頂点を目指していた。一年目から結果が出なければ政略結婚をさせられることが決定しているため、どうにかして一年目から全国大会出場を狙っている

　※リザの具体的な背景なんかは、担当さんからの指示で生まれた部分です。当初はただ、漠然と『強くなりたい』というだけのキャラでした。『ヒロインが主人公に惹かれる理由が弱い』と言われたため、いろいろ考えて今のような形に。おかげでグッとヒロインとしてのキャラが立ったと思います。　プロット段階で作品をよりよくするための意見をもらえるのが、プロ作家のいいとこですね。いや違うだろ、って思ったら戦うこともありますけど、大体は『確かに！』と納得することが多いです。

GA 文庫提出用　新企画プロット

・枢木檸檬子（くるるぎれもこ）
　ヒロイン２
　中学生で情報屋。主人公とは従兄弟同士。幼い頃から彼の努力を見続けていたため、主人公の復讐に加担する。

　※もう一人のヒロイン、神峰弓はプロットでは未登場。まあ、一巻ではプロット上の活躍はないため、あえて省いてます。企画会議用のプロットは必要最低限の情報でわかりやすいのが一番。余計なこと書くと、『このキャラなんのために出てきたの？』とか突っ込まれて面倒臭いのです。

・エドワード・ライゼンハルト
　※本編と名前違います。僕は本編で名前変えることが、多々あります。なぜ変えたかと言えば……執筆してるとき読んでたラノベのエドワード率が半端じゃなかったからである。三人ぐらいエドワード見っけちゃったんだよね……。
　三年生。
　学園序列一位の天才騎士。昨年世界８位。風を使う。甘いマスクと高い実力、そして紳士的なバトルスタイルのため、学内外を問わず人気が高い。主人公とは対極の人種。
　孤児院の出身。その孤児院は現在、彼の活躍によって出資を受け、成り立っている。

・聖乱華（ひじりらんか）
　主人公達が通う学園の理事長。その学園は、この理事長のワンマン経営であり、彼女の意見で全てが決まる。気に食わない相手は公衆の面前で恥をかかせてやらないと気がすまないタチで、主人公のこともそうしてやろうとするが、いつもうまくいかない。

――世界設定
　人間対悪魔の戦争が人間側の勝利で終わり、攻魔騎士同士の戦いはバトルエンターテイメントとなった世界。

――用語
・適合者（キャリア）
　魔界の扉が開いて以降、世界に満ちた魔力に適合し、体内に魔力を宿した人間。通常の人間よりもはるかに強い力を持ち、一部は特殊な力を使う。
　先天性の資質であり、後天的になることはまず不可能。だが主人公は祖父の虐待的特訓により、かろうじて適合者となった。

『最強喰いのダークヒーロー』プロット

・攻魔騎士
　適合者の中でも、戦闘技能に特化した者の総称。彼らが戦うスポーツの甲子園版が、主人公が参加する大会。

・人魔戦争
　五十年前、魔界の扉が開かれ、人と悪魔が争った戦争。世界中を巻き込む大災害に発展しかけたが、たった一人の英雄によって未然に防がれる。その英雄こそが、阿木双蓮であり、主人公の祖父。

・魔機剣（リボルバー）
　攻魔騎士の武器であり、魔力増幅装置。最新の技術で作られたものであり、各種メーカーが様々な商品を作ってる。銃と剣が一体になっており、適合者は魔弾を消費して、様々な特殊能力を発動する。
　主人公が参加する大会では、一試合につき六発がルール規定。
　なお大会では、最初の一発は、身体強化系魔弾にしておくのがセオリー。

・解放（フレア）
　魔力を解放し、一時的に身体能力を飛躍的に向上させた状態。
　攻魔騎士同士の戦いでは、基本的には常にこの状態。大会では、最初の一発でこの状態になる者が多数。普通の適合者ならば、無特訓でも一時間程度維持できるが、主人公は生来の適合者ではないため、三十秒程度しかこの状態を維持できない。そのため早漏と揶揄される。

・ソードウォウ
　今世界で一番人気のあるバトルエンターテインメント。魔機剣を持った攻魔騎士が、お互いに体にターゲットをつけて戦う。現代でいうならフェンシング的なスポーツ。
　ターゲットの位置は、両腕、両足、胸。
　両腕両足が１点で、胸が五点。

・祓魔祭（カーニバル）
　年に一度開催される、ソードウォウの高校生世界大会。現代でいうところの甲子園みたいな大会。アマチュアの聖地。

※ここから先は、ガチでネタバレ多数。一巻をまだ読んでない人、今ならまだ間に合うから、急いで引き返すんだ！そして本屋に行くのだ！

――ストーリー

・第一章

学園で開催された『祓魔祭』予選。

リザは期待のホープとして初戦に望むが、ダークホースの主人公に完敗。

その理由は、双士郎が大会事務員に変装して、「初戦の方は一度、武装のチェックを行います」と言って彼女の武装を預かり、細工をしたから。

その事実を知ったリザは、激昂して双士郎に詰め寄るが、どこにも証拠は残っていないため、今では後の祭り。

リザは悔しがるが、そこで主人公の目的――『祓魔祭制覇』を知る。

また、主人公は団体戦での優勝も狙っており、そのためのメンバーにリザを誘う。一年目から結果が出なければ親の言いなりになることが決定していたリザは、止む無く主人公の賭けに乗る。

その後双士郎は、予選会での素行不良が問題視されて学園理事に呼び出されるが、そこで理事長を挑発。「一度でも負けたら退学してやる」と宣戦布告する。プライドの高い理事は、双士郎の挑発を受ける。

なお、全て双士郎の策略。普通の高校ならば強制的に退学させられる恐れがあったが、理事がワンマン経営をしているこの学園の場合、理事は是が非でも相手を公の舞台で恥をかかせたいと思うため、退学させられない。

・第二章

リザは双士郎と共に檸檬子の元へと向かう。

檸檬子から、双士郎の壮絶な過去を聞く――祖父からの虐待に近い特訓を受けながら、親族はもちろん両親ですら、祖父を怖がって助けには行かなかった。祖父が死んで初めて解放されたが、そのときには頭髪が真っ白になっていた。

リザは主人公の過去に同情しつつ、同時に双士郎が生来の適合者ではなく、魔力を維持するための投薬と調整により、尋常ならざる苦痛を毎日味わってることを知る。

家族のエゴによって人生を弄ばれていた双士郎に、リザは近しいものを感じる――リザ

は実は愛人の子であり、実の父親からは政略結婚の道具としか思われていない。そんな自分の運命を覆すため、『祓魔祭』出場を狙っている。

・第三章

双士郎の第二戦と第三戦。

理事長の策略により、一日に二戦という、通常ならばあり得ないことをさせられるが、物ともせずに突破。

続く第四戦の相手は、理事長の差金により、本来ならば予選に参加するはずもない、学園序列一位のエドワード・ラインハルトと決定する。

・第四章

エドワードは、学内外を問わず人気の高い騎士で、負傷した相手と戦った場合は、負傷箇所を一切狙わないようなフェアプレイ精神の持ち主（後の伏線）。

リザは強敵に戸惑うが、双士郎は「すでに敵の弱点はわかっている」という。

そしてさらに、リザに向けて応援に来るように頼み、「お前が見ていてくれれば勝てる」と言う（伏線）

その話をした帰り道――双士郎は何者かの夜襲に合う（伏線）。

※ここから一巻のオチ！　最大のネタバレ！

急いで引き返すんだ！　そして本屋に行（ ）

・第五章

エドワード戦。

双士郎は、片腕を吊るして来る。負傷した状態で試合開始。

エドワードは主人公の負傷を理事長の差金だと判断し、卑劣な手に苛立ちを覚えるが、フェアプレイ精神に乗っ取り、主人公の負傷は一切責めることなく戦う。

しかし双士郎が声高に、「俺の負傷した腕ばっかり狙ってくるんじゃねえよ！」と叫ぶ。

その叫びの結果、会場は「まさかエドがそんな卑怯な真似を」「いや、相手の弱点を責めるのは立派な戦略だ」「いやいやエドはそんなことしない」「卑怯者が相手ならそれぐらいして同然だ」などと、大混乱に陥る。

いつも人気者として戦ってきたエドワードは、会場の異様な空気に呑まれ、動きが悪く

なり、そこを攻め入られる。
　主人公の卑劣な策に怒る反面、同時に感心もする。
　そこで主人公が第二の策――負傷していた腕で攻撃を放つ。
　実は夜襲そのものが、主人公の自作自演。リザに協力してもらい、エドワードが特訓をしている場所の近くで、わざと悲鳴を上げて、負傷したふりをした。
　意識の外にあった腕からの攻撃を受けたエドワードは、挙を突かれて動揺。そこで主人公は三十秒しか使えない『フレア』を発動し、一気に攻め入る。
　主人公の猛攻の中、エドワードは考える。
「三十秒耐え切ればこちらの勝利。敵のフレアが三十秒しか保たないのは公式の情報」
「だが、三十秒とは、正確には何秒なのか」
「存在全てが詐欺のようなこの男のことだ。必ずペテンを仕掛けてくる」

　戦いを見守るリザは、主人公から聞かされた作戦を思い出す。
「俺のフレアは、実際には三十五秒持つ。だが、俺はこの二年間の定期検査で、全て三十秒ジャストで発動が解けたフリをしてきた。今回も俺は三十秒ジャストで、一度フレアが解けたフリをする。相手は必ずその隙をついてくるから、その瞬間に俺のカウンターが決まる」
　リザは祈るような思いで、作戦の正否を見守るが、エドワードはその作戦を全て読みきった。なぜ読みきれたかと言えば――エドワードの視界にリザがいたから。

「双士郎くん。きみは一流のペテン師だ。言動の全てが計算されつくした罠であり、僕には到底読みきれない――だが、彼女は違うだろう？」

　観客席にいるリザの一挙一投足から、エドは作戦の全てを悟る。
　三十秒のフェイクを突破し、三十五秒が経過。
　リザは主人公の敗北を確信し絶望し、その場に崩れ落ちる。その動作を確認したエドワードが、一気に攻勢に出る。
　が、しかし。
　その全てが双士郎の罠。
　双士郎のフレアは、本当は四十秒持つ。
　リザに教えたのは嘘で、リザを観客席に呼んだことも、彼女に「お前が見てくれれば俺は勝てる」と言ったことも、もっと言えば、彼女を団体戦のメンバーに誘ったことすら、全てが伏線。
　理事長が学園最強のエドワードを持ち出してくることまで読みきった上で、リザを囮として利用することを考えていた。

　カウンターが決まり、エドワードに勝利した双士郎。

エド「迂闊だった……。きみは、入学当初から、わざと三十秒でフレアを解除し、学園の全てを欺いていたということか」
双士郎「少し違うな。入学当初は、本当に三十秒しか保たなかった」
エド「なに？」
双士郎「てめえ、フレアは最初何分保った？　十年に一人の天才くんのことだから、最初から三十分ぐらいは余裕で保っただろ？　ちょっと努力してコツ掴めば、一、二時間は簡単に伸ばせたんじゃねえのか？」
エド「……」
双士郎「こちとら、超がつくほどの無能で、センスの欠片もねえ劣等生でな。十秒伸ばすのに、二年かかったぜ」
　――というやり取りで、主人公の努力も見せる。

　自分のせいで孤児院を潰してしまったことにエドワードは落胆するが、直後、双士郎により「お前のスポンサーの金を、途中で巻き上げている奴がいる」と、悪徳な中間業者の存在を教える。

　エドワードは、双士郎を見直し、一人の戦士として認める。
　しかいそれもまた双士郎の策で、後にエドワードを団体戦メンバーとして加えるための伏線。

・エピローグ
　自分が利用されていたことに気づいたリザは、激昂して双士郎に詰め寄る。「なにが、『お前が見てれば勝てる』よ！？　あの作戦が実行できれば、私じゃなくても、誰でもよかったんでしょ！」と怒鳴るが、双士郎は否定せず「そうだ。お前は、学園最強を手駒にするための、ただの捨て駒だ」と頷く。
　それから、
「悔しかったら――お前じゃなきゃ駄目だって俺に思わせてみろよ」
　と言い放つ。
　リザは怒り心頭となり、深く傷つくことになるが、そこに檸檬子が姿をあらわす。
「双士郎は、きみのこと、本当はすごく高く評価していたよ」
「親族に玩具にされそうな運命に必死にあがこうとしているきみを『かっけーじゃねえか』って言ってたんだ」
　金持ちのお嬢様の反抗期、としか言われなかった自分の行動を双士郎がそんな風に評価してくれていたことに、リザにとってはこの上なく嬉しいことだった。

『最強喰いのダークヒーロー』プロット

　翌日、リザは再び双士郎の前に姿を表す。
「私は絶対にあんたみたいな男を認めない――だけど、私のことはあんたに認めさせてやる！」
　と言い放ち、頂点へと駆け上がる双士郎にどこまでもついていくことを誓う。
　双士郎は檸檬子相手に「お前、なんか言ったか？」と言うが、
「僕はね、双士郎が世界で一番かっこいいと思ってる。僕だけがそのかっこよさをわかってればいいと思ってるんだけど、たまに布教活動したくなるときもあるのさ」
　と、檸檬子はのろける。
　そこにエドワードもやってきて、チーム双士郎の初めてのトレーニングが始まる。

※後書き。
　他の人のプロットとか見たことないのでなんとも言えないのですが、新企画のプロットはこのぐらいの文量が普通なんじゃないかなあ、と思います。
　このぐらい細かく具体的に書けば、編集部の人にも、作品がどういう風に仕上がるのかとわかってもらえるのではないかと。
　まあ、僕はプロットから逸脱することが本当に多いんですけどね。
「企画会議さえ通しちまえばこっちのもんだ！」と考えてる部分もあり、また「面白けれりゃプロットと違っても文句ないだろ！」と考えてる部分もあるので、基本は、本文を書いてるときのテンションやフィーリングを重視します。正直プロットは、企画会議通った後、ほとんど見返さないからなー。
　なお、当初はこのプロットには『２巻ではこんなことやりたい』みたいなことも書いてたのですが、そこはカットさせてもらいました。

　どんな内容がカットされたかは、**８月発売の２巻を乞うご期待！**